

Title	日本高等教育における母語・継承中国語学習者のアイデンティティ研究一言語習得の角度からー
Author(s)	李, 光曦
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/88125
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (李 光 曦)	
論文題名	日本高等教育における母語・継承中国語学習者のアイデンティティ研究 —言語習得の角度から—
論文内容の要旨	
<p>本稿ではアイデンティティを「学習者が移動の中で多様な言語環境で言語を習得し、使用し、言語能力の変化を経験する過程とともに構成される、多元的で、かつ多様で動的な、自己についての本人の認識」と定義し、ライフストーリー研究法を用いることで、実証型の量的研究では明らかにできなかった継承中国語学習者の主観の問題、また言語学習の中で変化する主観とその要因などを考察する。継承中国語学習者がいかなる動機で大学の中国語専攻に入り、いかなる学習環境のもとで勉強し、いかにして自分の言語能力を向上させたか、この過程をアイデンティティ構築の角度から描写する。</p> <p>本研究の目的は、実際の継承中国語学習者の「声」を聞き、その声の意味を理解することによって、多様化する中国語教育の現場に新たな視座を与え、継承中国語学習者が中国語を学ぶ「意味」を再考することである。</p> <p>第一章では、母語・継承学習者のアイデンティティと言語学習における研究動向を概観し、まず「継承語」「継承語学習者」「継承語学習」の三つの概念の歴史的変遷と今までの研究成果を詳しく論述する。次いで、本稿の中心概念であるアイデンティティの概念をめぐる研究を取り上げ、アイデンティティに関する研究と言語教育との関係性を整理し、アイデンティティ概念の継承語教育における位置付けとその重要性を述べる。また、アメリカと日本における高等教育での継承語教育の発展を詳述し、大学で中国語を学ぶ継承語学習者の現状と課題を浮き彫りにする。</p> <p>第二章では、本稿の研究テーマ「母語・継承語学習者のアイデンティティ」に関する理論的基盤と研究方法を取り挙げる。高等教育における継承中国語学習者は、成人として継承語を大学で学習するという側面からは、Nortonの第二言語習得におけるアイデンティティ概念を理論的根拠として取り上げ、多言語多文化環境で言語マイノリティ児童として成長してきたという側面からは、FOK（知識の資金）とFOI（アイデンティティの資金）理論及び継承語学習能力開発の理論を取り上げる。これらの理論基盤を踏まえ、本稿では構築主義の立場でナラティブ研究のライフストーリー研究手法で調査を行う。</p> <p>第三章では、大学で中国語を専攻する継承中国語学習者を対象に、ライフストーリー研究法を用いることで、特に継承語学習者の大学入学以降のアイデンティティ構築の過程を、「学習動機」「学習環境」「言語学習」の3つの角度から分析している。その結果、継承語学習者は継承語を財産として、その価値を最大化したいという動機と、親族との愛情を深めたいという動機を持っていることが明らかとなった。また、大学の学習環境には、言語能力を肯定的に評価し、アイデンティティを考えるきっかけを与え、「居場所」を提供することができるという役割があることも明らかとなった。そして、言語学習を通して継承語学習者は、自身のルーツや血縁、家族を受け入れることができ、「中国語ができる私」というアイデンティティの再発見につながるということも明らかとなった。</p> <p>第四章では、継承語としての中国語学習者一名を対象に、大学や中国本土での継承語学習経験を経て、アイデンティティが具体的にどのように構築されてきたのか、主体性と継承語学習はアイデンティティにどのような影響を与えているのか、継承中国語学習者のライフストーリーを長期にわたって縦断的に考察することを試みている。その結果、継承語学習者のアイデンティティはただ一つの「ラベル」のような説明的なものではなく、極めて多様かつハイブリッドで、社会的文脈から強く影響を受けながら他人との関わりの中で生成されるものであることがわかった。また、エスニ</p>	

ックグループ・国籍・文化・血縁・言語などの枠を超えたアイデンティティを築くことができ、さらにその葛藤の過程を次世代の人に伝えたいという社会還元の考えを持つことも確認された。単一文化・言語の環境下で成長したハイブリッドなアイデンティティを持つ子どもが自分のアイデンティティを確立する過程には、周囲から押しつけられる同化や異質化の圧力を受けながらも主体性を発揮し、継承語学習の過程で様々な葛藤を経験し、そしてその葛藤を克服することが見られた。

第五章では、三人の中国語教師を対象に、教師の個人的および職業的な経験、継承語学習者の出現と彼らへの認識、教室で継承語学習者への対応と評価、外国語コース及び継承語学習者への要望について半構造化インタビューを行った。データから主に四つの主要カテゴリーといくつかのサブカテゴリーが検出される。(1)継承語学習者の入学動機、学習動機、継承語学習者への判断の方法、(2)継承語学習者への対応、要望、(3)継承語学習者へのアセスメントの方法、(4)外国語学部コースへの要望及び対策である。教師は継承語学習者が一般の外国語学習者と比べて異なる動機を持って大学に来たということに共通の認識を持っているものの、その「異なる動機」としてはすでに持っている継承語能力を利用して大学で楽をしたいという推測も挙げられている。特に教師から見れば、大学の外国語教育はまさに「外国語」として言語を教えているため、「継承語」として言語を教えているわけではないという前提が存在しており、継承語学習者はいかなる動機で大学に入ったかにかかわらず、「外国語教育」の枠組みで学習を進めなければいけない。今後の対策として、継承語学習者の能力を正確に把握した上で、その能力をどのように授業で活用できるのか、学習者と教師が相互に確認できた上で、授業のリソースとして利用することや、学習者のアイデンティティ資金を利用することでコミュニティと連携をとることなども考えられる。

今の日本社会は、移民の増加と少子化の加速に伴い、日々多文化・多言語社会へと向かっている。この変化の過程で、移民の子女は決して解決すべき問題などではなく、日本社会の多元化を推進するものである。移民の子女たちの生まれ持ったバックグラウンドと言語面での優越性を考慮すれば、彼らは日本と外国とのコミュニケーションにおける架け橋かつ国際交流の使者となり得る。日本社会が多文化・多言語社会へと移行しつつある昨今、外国にバックグラウンドを持つ人々の数は増加こそすれ、減少することはない。複数の国や地域を移動しながら成長した子ども、多言語・文化的背景を持つ子どもが、いかにして現代社会の中で成長するのか、社会や学校は彼らが持っている多言語・文化の力をいかに成長させ、どのように社会や国に還元させることができるのか、これらは現代社会を生きるすべての人々が思考し、対応していかなければならない課題で、そのための環境構築が今こそ求められているのであると考える。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (李 光 曦)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	古川 裕
	副 査	教 授	林 初梅
	副 査	講 師	櫻井千穂
	副 査	准教授	中田聡美
	副 査	准教授	張 恒悦

論文審査の結果の要旨

『日本高等教育における母語・継承中国語学習者のアイデンティティ研究—言語習得の角度から—』と題する本論文は、外国語としての中国語ではなく、継承語として中国語を大学の専攻語として学ぶ学生に焦点を当て、彼（女）らがいかなる動機を持ち、いかなる学習環境の下で学び、いかにして言語能力を向上させたかについて、その過程をアイデンティティ構築の角度から論じている。ライフストーリー研究法によって継承中国語の学習者の声を聞き取り、その声の意味を理解することを通じて多様化する中国語教育の現場に新たな視座を与え、継承中国語学習者が大学で中国語を学ぶ意味を再考することを目的としている。本論文は以下のような構成である。

第1章「母語・継承学習者のアイデンティティと言語学習」では、「継承語」「継承語学習者」「継承語学習」の三つの概念の歴史の変遷と研究の流れを論じている。また、アメリカの高等教育機関における継承語としての中国語、スペイン語などの教学について経緯・現状と課題を指摘している。

第2章「理論基盤と研究方法」では、本論の研究テーマをNortonのアイデンティティ概念とFOK（知識の資金）、FOI（アイデンティティの資金）を理論基盤とし、ナラティブ研究のライフストーリー研究手法で調査を行うことが述べられている。

第3章「日本高等教育における継承中国語学習者のアイデンティティ構築の影響要素」では、大学で中国語を継承語として学ぶ学習者を対象として、彼（女）らのアイデンティティ構築の過程を「学習動機、学習環境、言語学習」の三つの側面から分析している。

第4章「日本高等教育における継承中国語学習者のアイデンティティ構築の過程」では、前章の協力者のうち一名を対象に、当該の学習者が大学入学期から中国での留学を経て数年の間にアイデンティティがどのように構築されてきたのかについて、そのライフストーリーを長期にわたって縦断的に考察している。

第5章「日本高等教育における外国語教育の課題」では、日本の大学で中国語を教授している三名の教師を対象にして、継承中国語学習者の出現と彼（女）らへの認識、対応と評価、要望、そして日本の外国語教育が取るべき対策などについて行った半構造化インタビューのデータを紹介している。

第6章「まとめ」では、上述の第3章から第5章の考察結果をまとめ、高等教育における外国語教育が現在、もしくは今後直面することになる多様性への提言を行っている。

本論文は第1章と第2章が紙幅のほぼ2/3を占めており、考察の中心となるべき第3～5章は全体の1/3であるというように、バランスに偏りがあり、先行研究の紹介が後半での研究にリンクしていない。その結果、継承中国語学習者に関する議論および彼（女）たちを教授対象とする教師に関する研究が十分に深まっていない憾みがある。これは、本論文が「まとめ」で述べているように今後の研究に引き継がれる問題である。しかし、著者は論文全文を流暢な日本語で明確に記述しており、その主張は十分に耳を傾ける価値のあるものである。

以上のように本論文は、現在そして将来の日本社会にとって現実的で切実なテーマを取り上げ、優れた考察をしており、本審査委員会は全員一致で本論文が博士（言語文化学）学位を得るにふさわしい論文であると評価した。